

観光資源としての出雲大社の実態

前垣 瑞生

- | | |
|---------------|--------------------|
| I はじめに | IV アンケート結果からみる出雲大社 |
| II 出雲大社の概要 | 1) 調査の概要 |
| III 出雲大社観光の変遷 | 2) 旅行者数と旅行者構成 |
| 1) 交通について | 3) 宿泊について |
| 2) 宿泊客について | V おわりに |
| 3) 現状 | |

I はじめに

人はなぜ旅行をするのだろうか。美しい自然と触れ合うためであったり、新たな知識を得るためであったり、あるいはスポーツやリゾートのためであったりと、その目的は人によってさまざまである。江戸時代には伊勢神宮に代表される、国の神々への信仰も庶民の間に広まり、見物し参拝するというかたちで「旅」と結びついてきた。現代ではゆとりの必要性が叫ばれており、国公立学校での学校週5日制や、企業での労働時間の短縮などといったことがすすんでいる。このような休暇、休日の増加により自由時間もまた増加していくことは間違いないであろう。ある程度の長期休暇と旅行というのは密接に結びついている。休みには旅行を、と言う考えは多くの人の頭の中にあるはずである。ともすれば日本人はそのような長期休暇を持て余しがちであるが、自由な時間の増加、余暇やリゾートにお金を使おうという人々の意識の変化、所得の安定により、これからは旅行は人々の中で大きな位置をしめていくと思われる。また、その旅行に観光というものは密接に結びついている。旅行とは日常性を超えた非日常の世界へと自らを導くものであり、多くの人は旅行をする際何らかの旅行の目的を設定する。それはささいなことであるかもしれない。だが、その目的として観光を挙げる人は多いはずである。観光をする場合、「見る」「体感する」といった対象が必要である。不況の影響が観光産業にも顕著に表れている昨今、全国各地の市町村はその対象、つまり観光資源に独自性や固有性をもとめている。

それは島根県も例外ではない。島根県における観光というと、多くの人が最初に挙げる観光地は出雲大社であろう。出雲大社といえば伊勢神宮と並び、誰もが知っている神社である。また、日本交通公社の研究グループのまとめた全国の観光地の評価基準では特A級という高ランクに位置する場所である。しかし出雲大社周辺での特別な観光産業というのはあまり耳にしない。なぜ出雲大社周辺では特別な観光産業が発達しないのか、そして唯一出雲大社周辺で発達しているといえる観光産業である、宿泊産業について調査してみたい。不景気の影響で観光産業は全国的に衰退しつつあるが、出雲大社にもその影響があるのか、古くから名所として栄えた出雲大社周辺での現状はどのようなのかを、観光客へのアンケートと行政、観光協会と実際の宿泊施設の方への聞き取り調査によって、明ら

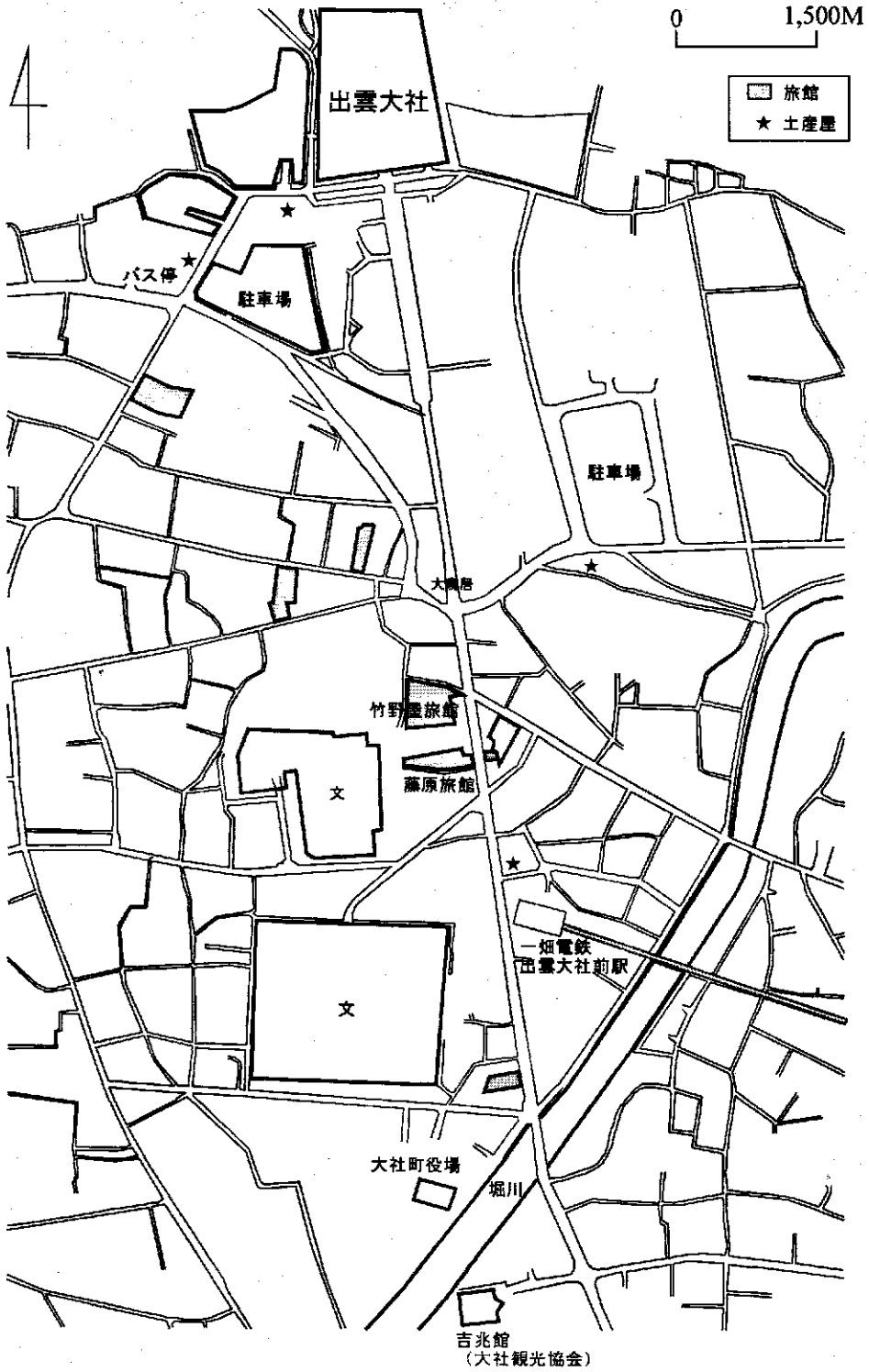
かにしたいと考えるのである。

II 出雲大社の概要

出雲大社は『日本書紀』や『古事記』に始まりが詳しく書かれてあり、千年以上の歴史をもつといわれる神社である。祭神は因幡の白兔や国譲りなどの神話の主人公である^{おおくにぬしおおかみ}大国主大神であり、昔から「だいこくさま」と呼ばれ、縁結びの神や福の神として親しまれている。出雲大社では何度も造営が行われ、現在の本殿は1744（延享元）年に建てられたものである。また、その本殿の建築の様式は日本最古の大社造りとして国宝に指定されている。現存の本殿も規模の大きさ、太い部材などを見ると十分雄大であるが、伝承や史料によると古代にはそれよりもさらに雄大であったということである。境内では古代や中世などの各時代にわたる、数々の遺物が出土していたが、2000（平成12）年4月には出雲大社境内にある発掘現場から、直径3mにもおよぶ巨大な柱材が発掘された。それは3本の柱を一束に束ねた巨大柱で、大昔の巨大神殿の図面に当てはまり、歴史を知る重要な遺物として注目されている。

第1図の地図からわかるように出雲大社は北側を山によって囲まれ、出雲大社を中心に南へと町が広がっている。大きな参詣道が南北に走り、門前町としてこの地域が発展してきたことがわかる。出雲大社周辺に住む人々の多くは大社教と関係があり、出雲大社と密接に結びついている。大社教とは大国主大神をまつるもので、その中心となる出雲大社の官司は現在第83代になる。出雲大社では行事も盛んに行われ、それにともない他地方の人々の出雲大社への入り込み数も変化する。出雲大社周辺で経営されている宿泊施設の方々の話によると、宿泊客が多いのは初詣の時期と8月5日から9日の協会大祭、そして旧暦10月10日の^{かみかみ}神迎祭、旧暦10月11日から16日の^{かみかみ}神在祭、同じく旧暦10月17日の^{かみかみ}神去祭の時期であるということであった。そのような出雲大社の行事のときに訪れる人々は大社教の関係者がほとんどであり、大社教の信者でない人が訪れることは少ない。そのような大社教信者の人々は出雲大社へ参ることが目的であるので、出雲大社周辺の宿泊施設を利用し、また1泊だけするのがほとんどで2泊、3泊と長い間泊まることはまれだということであった。しかし出雲大社を訪れるのは何も大社教信者の人々だけではない。出雲大社を訪れる観光客の季節性について、大社町役場観光商工課及び大社観光協会の方々にお話を聞いたところ、宿泊施設の方のお話と同じように、初詣はやはり観光客は多いということであったが、他の時期ではゴールデンウィーク、そして8月のお盆の時期に多くの観光客が訪れるということであった。これらは一般的な休日であり、全国的にも旅行をする人々が一番多い時期で、他のどこの観光地でも共通の観光客の季節性であるといえるであろう。では、この大社教信者ではなく出雲大社を訪れる人々はどの場所の宿泊施設を利用するのだろうか。それは出雲大社周辺の宿泊施設ではなく、松江市内といった大きな都市、もしくは玉造、三朝、城崎、皆生といった温泉地の宿泊施設を利用することが多いのである。その理由としては、1985（昭和60）年代ごろから始まった温泉ブームが、高齢化社会の進展やストレスや病気に対する人々の認識の変化などによって、いまだ人々の中で廃れていないことや、旅館からホテルへ、という旅行者側の意識的な変化などが挙げられる。しかし最も大きな理由は、交通機関の発達であろう。特に自動車の

普及と自動車道の整備によって他の地域からでも短時間で出雲大社まで来ることができるようになり、出雲大社周辺の宿泊施設を利用しなくても出雲大社を訪れることが容易になったのである。交通機関の発達による出雲大社周辺の変化についてはⅢの1)で詳しく述べることにする。



第1図 出雲大社周辺の概観図

注) 旅館、土産屋はゼンリン住宅地図による。

Ⅲ 出雲大社観光の変遷

1) 交通について

明治時代末期に山陰地方で鉄道が開通し、山陰の中央部は大阪を中心とする関西圏との交流が簡単になった。これと同時に、関西圏や他の地域からの観光客も山陰中央部に入り込むようになった。全国からやってくる社寺史跡温泉めぐりの観光客は出雲大社をUターン地点の折り返し地点とする流動パターンを作り出し、結果として山陰中央部の観光地帯が形成され、観光パターンも形成していった。しかし、そのようないろいろな場所をめぐる観光客が出雲大社周辺の宿泊施設を利用することは少なく、温泉集落（玉造温泉、三朝温泉、城崎温泉、そして後になって皆生温泉）に宿泊することが多かった。この傾向は、1980年代の自動車の一般家庭への普及と自動車道路の整備により加速される。中国自動車道ができてからは、出雲大社への参拝客のほとんどが自動車を利用して訪れるようになっている。ツアーでもバスで移動というかたちがとられ、夜は温泉集落の宿泊施設を利用するというかたちが増えてきた。そのため、出雲大社周辺の宿泊施設は駐車場を必ず持っていなければならない状況にある。出雲大社自体も参拝客専用の駐車場を設け、連日観光客の自動車が入り出している。目的地である出雲大社まで自動車で行くことができるので、出雲大社を最北部として南北に走る参詣道は一層廃れてきている。特に土産屋は自動車の普及や自動車道の整備といったことで、交通の便が大幅によくなったこと、またその影響によって日帰り客が増えたことにより、出雲大社周辺の多くの土産店が店じまいをしてしまっている。そして、JRの大社線廃止もこの傾向に拍車をかけた。JRを利用しての出雲大社への参詣ができなくなり、自動車で来ざるを得なくなったのである。同じころ、出雲大社に参詣する観光客の中では玉造、三朝、城崎、皆生温泉のほか、松江・米子・出雲市内などのホテルに宿泊する人が増えてきた。一方、出雲大社周辺の宿泊施設への宿泊率は依然として低い状態であった。地方自治体をはじめとするさまざまな機関が活性化を目指して計画を図ったが、出雲大社周辺地域の衰退はいまだ完全にとめることはできていない。出雲大社周辺に代表される門前町では、交通革命への対応がこれからも大きな課題となるのは間違いない。観光地への直通道路は、その観光地の魅力や性格に非常に大きな影響を与える。役場としては、この流通発達による町の衰退を止めて、どのように観光客を呼ぶかを考えているということであった。

土産屋の衰退には交通機関の発達ということ以外にも理由は考えられる。以前は旅行をすれば、家族や友人のため、もしくは自分自身へ旅行の記念として土産を買っていた。しかし最近の旅行者は土産をあまり買わなくなっている。その理由としてはもちろん、不況の影響で人々がお金をあまり使わなくなったということがある。そして以前は土産を近所の知り合いや親戚のためにも買って帰っていたが、今やそのような習慣が薄れてきているということも考えられる。しかし最も大きな理由は土産品に個性がなくなってしまったことではなかろうか。その土地限定の土産品というのが減ってきている。どこへ行っても同じような土産品ばかりが店先に並んでいるのが現状である。ここでも交通機関の発達の影響がある。物流システムや食物の保存技術が発達したことで、遠距離であっても民芸品や工芸品、食物を運び売ることが可能なのである。また、情報化がすすみ人気のある商品についてや、新商品についての情報が簡単に得られるようになったことも土産品の画一化を加速している。今後の

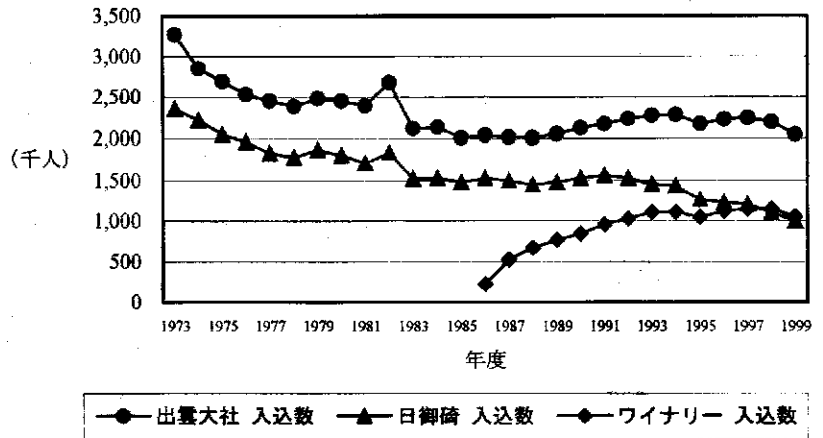
土産品およびその土産品販売について考える上で重要なのは、旅行がより多様化し、人々も旅行経験をつむにしたがって、土産品にも個性と多様性がいっそう要求されてくるという点であろう。

2) 宿泊客について

第2図を見てもわかるように出雲大社を訪れる観光客の数は全体的に見るとゆるやかな減少傾向にある。それにともない出雲大社周辺の宿泊施設を利用する人も減っている。前述したとおり、大社教の信者の人々は行事などの際には出雲大社周辺の宿泊施設を利用する。そのため大社教の信者というのは大幅に減少することはなかったのだが、それ

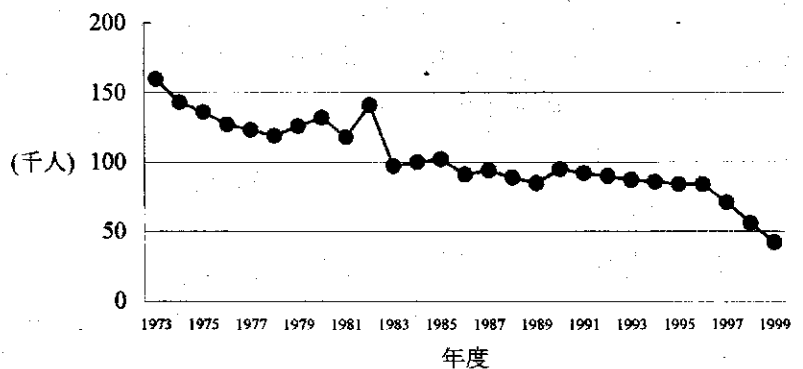
もやはり徐々に減少傾向にあるのが実情である。そして実際に出雲大社周辺の宿泊施設で話を聞くと、出雲大社周辺の宿泊施設では最近、特に大社教の信者ではなく、一般観光客の減少が見立つということであった。第2図では1882(昭和57)年に一度入り込み数が出雲大社のみならず、日御碕などの他の場所も一時的に増えている。これはこの年に島根において国体が開催されたからである。グラフによると国体後、入り込み数は一度減少したものの1888(昭和63)年から5年間は右肩上がり増加している。しかし出雲大社周辺の宿泊施設で実際に話をうかがってみると、国体後は宿泊客が減ったということであった(第3図)。その理由としては、それまでは毎年来ていた各地からの修学旅行生が国体を契機に来なくなってしまったということであった。修学旅行というものは不思議なもので、毎年決まった場所に行くという傾向がある。最近になって、生徒にアンケートをとったり、毎年教員が白紙の状態から考えたりする学校が増えているが、この当時はまだまだ毎年同じ場所へという意識が強かったはずである。

だが国体により学校は宿をとることができず、修学旅行先を変更せざるを得なくなったのである。そ



第2図 入り込み動向

出典) 大社町役場観光工商課資料より作成。



第3図 出雲大社宿泊数

出典) 大社町役場観光工商課資料より作成。

して変更後は再度変更することはなく、今度はその変更先がほぼ不変の場所となったということである。出雲大社への昔からつづくお宮参りという習慣が、時代とともに変わっていった修学旅行の意義、もしくは生徒や保護者の考え方に合わなくなっていたのかもしれない。

全体の出雲大社への入り込み数の減少の割合は第2図を見る限りそう大きくはない。しかし、その入り込む数にカウントされている観光客の多くは松江市内や温泉地に宿泊しているか、もしくは日帰り客である可能性が高い。なぜなら松江市などの地域での宿泊施設の整備、温泉ブーム、そして前述のとおり交通機関の発達と自動車の普及などといった理由が考えられるからである。つまり出雲大社を訪れる観光客の総数に著しい変化は見られなくても、出雲大社周辺地域の宿泊施設を利用する観光客の数は徐々に減少しているのである。

3) 現状

近世では宿場町などの宿泊地は旅には必須のものであった。しかし交通手段の発達によりその必要性が消えてしまった。この交通手段の発達による影響は出雲大社のみならず全国の観光地に影響していると思われる。特に出雲大社周辺のような宗教と一体となった門前町においては、宗教活動の場と宿泊地とが同じである必要はなくなってくる。わざわざ出雲大社周辺にとどまって夜をすごさなくても、温泉地や他の観光地の近くに宿泊することが可能になったのである。つまり、観光資源がある場所と宿泊する場所が分かれてきているのである。また、修学旅行の現象は子どもの数の減少とも関係していると思われるが、それでも海外への修学旅行は増加している。今後とも費用の安い韓国や中国、東南アジアなどへの修学旅行は増えるであろう。出雲大社や伊勢神宮へのお宮参りだけでなく、広島、長崎といった平和学習のための修学旅行も徐々に減少傾向にある。今一度修学旅行生を出雲大社へ呼び戻すのは困難だろう。全国的に有名な出雲大社でありながら、自動車の普及や温泉利用の活発化によって、出雲大社周辺地域はすっかりかつてのにぎわいがなくなってしまった。観光地は宿泊施設や観光施設などだけで成り立っているわけではない。行政や観光協会、一般住民など、地域の多様な人々と組織が観光地を支えている。宿泊客を呼び寄せることは、観光による経済効果を飛躍的に高めることになる。したがって、単に優れた観光資源を持っているだけでは不十分であり、純粹に宿泊観光地としての魅力もが問われる時代になってきているのではないだろうか。

IV アンケート結果からみる出雲大社

1) 調査の概要

本調査は出雲大社を訪れる観光客について実際に調べるということを目的として行われた。調査対象は出雲大社を訪れている観光客である。調査方法は、出雲大社周辺でのヒアリング調査で、調査員が直接聞き取った内容を所定の記入用紙に記入した。調査日は2001(平成13)年8月28日と30日と31日であり、28、30日は晴れだったが、29日は雨だった。

調査では合計37組の方から、宿泊地、出身県、宿泊数、交通機関などについて話を伺った。アンケート結果をグラフ化したものには、合計が40となっているものもある。それは、1度の旅行で2箇所

以上の宿泊地に泊まる方たちの宿泊地をそれぞれカウントしているからである。

2) 旅行者数と旅行者構成

旅行者数と旅行者構成については、第1表にまとめたとおりの結果であった。旅行者数とは今回の旅行で行動をとともにしている人数のことである。旅行者構成とは第1表の項目のとおり、今回の旅行にどのような関係の人と来ているかである。この二つの属性についてまず見ていこうと思う。そこでこの二つの項目をクロス集計にかけたのが第4図である。まず単独での旅行者だが、二組である。その一組の方は男性であり、もう一組の方は出雲大社近辺に住む女性であった。男性のほうは東京から自家用車で特に目的地を決めずに来たという二十歳代の方であり、女性のほうは夕刻に散歩ついでに鉄道を利用して参拝に来た五十歳代の方であった。やはり、男女ともに一人旅というのは少ないようである。しかし、出雲大社は縁結びの神様として有名だということは前述したが、テレビや新聞などでそのことについて報道されると、その報道を見聞きして訪れる方がしばしばいるということを出雲大社周辺の宿泊施設の方も話しておられた。そのような場合は、本人であり、親御さんであり、一人旅が多いということであった。

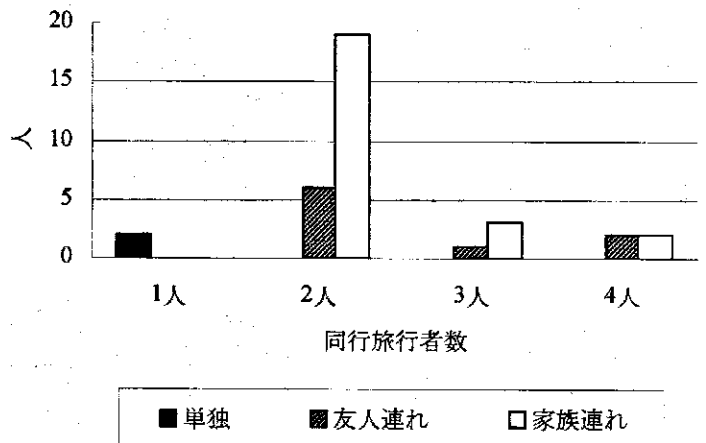
次に二人連れの旅行者についてだが、第1表を見ると旅行者数の全体の約七割を占めているのが見てとれる。また構成においても第1表を見ると家族連れが同じく全体の約七割を占めているのがわかる。第4図でも二人の旅行者数の箇所が他の箇所を引き離して多いが、二人連れでも友人連れが六組あり、家族連れだけが多いとは言いがたい。これは、アンケートの回答者のなかには結婚をしていない男女の組の方がおり、そのようなかたの組は家族連れではなく、友人連れというかたちをとることにしたからである。実際に二人連れの方で、同性で出雲大社に来ている方はアンケート回答者の中では二組だけであった。その二組とも女性二人の旅行者であった。

三人連れについては、これは会社の友達という男性一人、女性二人の組の方たち以外は、三組とも夫婦と小さな子ども一人という組み合わせであった。また、四人の旅行者については、第4図の友人連れ二組のうち一組は二組の夫婦が一緒に行動していた。つまりアンケートの回答が友人連れであっても、実質は家族連

第1表 旅行者数と旅行者構成

同行旅行者数	1人	2	5.4
	2人	26	70.27
	3人	4	10.81
	4人	5	13.51
	合計	37	100
		(組)	(%)

旅行者構成	単独	2	5.4
	友人連れ	9	24.32
	家族連れ	26	70.27
	合計	37	100
		(組)	(%)



第4図 旅行者構成と同行旅行者数の関係

れで訪れている人が多く、出雲大社への参拝者のほとんどは家族連れであるといえる。

3) 宿泊について

アンケート回答者の宿泊数を第2表にまとめた。圧倒的に一泊の人が多い。このことは出雲大社に限らず、他の観光地でも同じことなのではなかろうか。日本人は長期休暇といえども、海外旅行など以外では、費用の問題もあってなかなか二泊以上の旅行に出ることが少ないように思える。ついで日帰りが多い。これは前述した交通機関の発達による影響であろうか。他に考

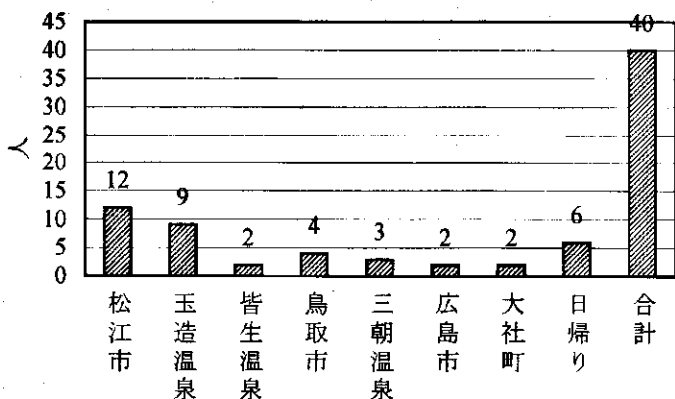
第2表 アンケート回答者の宿泊数

宿泊数	日帰り	6	15
1泊	23	57.5	
2泊	5	12.5	
3泊	2	5	
4泊	3	7.5	
5泊	0	0	
6泊	1	2.5	
合計	40	100	

(組) (%)

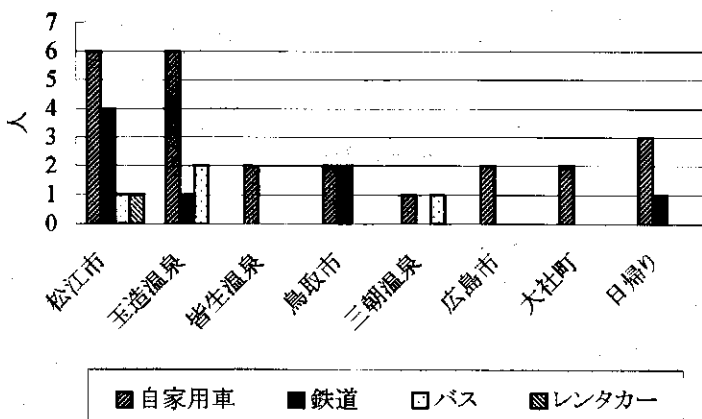
えられる理由として、地元の方が信仰のため、もしくは散歩のついでに、ということで訪れたということがある。今回のアンケートでも二組、地元の方がおられた。三泊から六泊の方々は偶然アンケートに回答して下さったと考えられ、特に重要ではないであろう。

次にアンケート回答者全員の宿泊先であるが、第5図のとおりであった。やはり大社町に宿泊する観光客は少なく、その代わり松江市などの大きな町や出雲大社から近い場所にある温泉地、また日帰り客が多いのを見て取れる。温泉地の中でも玉造温泉は山陰地方でも現在活気のある温泉地であり、出雲大社への交通の便もよいことから、宿泊客が多いものと思われる。



第5図 アンケート回答者の宿泊地

そして次に宿泊先と交通手段の関係を第6図に示す。自家用車を利用して出雲大社を訪れる観光客が圧倒的に多いのを見て取れる。次いで鉄道が多いがこれは第1図の地図にある、一畑電鉄を利用して出雲大社を訪れたということである。出雲市などの主要都市から出雲大社行きの観光バスが出ているのにもかかわらず、バスを利用しての観光客は意外に少なかった。



第6図 アンケート回答者の宿泊地と交通手段の関係

V おわりに

観光地における観光収入は、宿泊、交通、観光施設、飲食、土産などがあるが、その中で最も大きな観光収入を受けるのは宿泊施設であろう。つまり宿泊施設というは観光地周辺の地域経済にとって非常に大きな役割を担っている。また、宿泊施設では多くの従業員を雇う必要があるので、雇用という面でも地域経済にとって大きな役割を担っているといえよう。このように地域経済にとって重要な位置を占める宿泊施設は、人手不足・後継者不足や労働条件改善によるコスト上昇などさまざまな問題を抱えている。他の土地でも同じような問題を抱えているはずだが、大社町でも人手不足・後継者不足についてのことが大きな問題となっている。人手不足で休業する宿泊施設もある。役場の話では、大社町周辺の宿泊施設も後継者がいない状態であり結局昔のやりかたのままでやっているの、変化がないという話をされていた。しかし、実際に旅館にお話を伺ってみると、これまでのやり方をやめ、新しいやり方で経営していこうという考えはあるようである。事実、藤原旅館では旅行者側の旅館離れとホテル志向に対応しようと、現在はほとんどの部屋が和室だが、洋室を増やしていこうと計画している。また、料金の表示の仕方を「1万円～」というようなあいまいな表記にせず、「宿泊費は何円、朝食は何円、夕食は何円…」といったようにわかりやすくセパレート化して表記するなど、若い世代、つまり今の世の中にあつた経営方法を考へているようである。日本文化を守り続ける高級和風旅館だけが生き残るのではなく、多くの宿泊施設が宿泊施設として生き残るためには、自らの商品価値そのものを見つめなおさなければならない。

宿泊客が減少している理由として、前大社町旅館組合長は「温泉が全てだ」とおっしゃった。大社町でも温泉を掘ろうという計画が1885（昭和30）年前後におこつたが、信徒の反対があり、とりやめとなつたことがあるということである。旅館組合に所属している人の多くも大社教の信徒なので、旅館経営者の中からも反対する人が多かつたそうである。現在でも、ネオンサインなど町をきらびやかに見せるような装飾などは暗黙の了解で自粛しているということであつた。出雲大社とその周辺には、宗教、神話伝説、文化関係など、豊かで貴重な文化財があるわけであり、観光客を呼ぶにはこれらを有効的に活用しなければならない。しかし出雲大社らしさということもとても大切である。役場、観光協会でも出雲大社という観光資源を活かしつつ、観光客を呼び寄せられるよう対策を練り、数々の活性化と地域整備を図っている。

現在ある観光資源をどう活用していくか以上に、観光地にとって大事なことは将来の目標作りである。観光協会の方が、これからのテーマについてお話くださった。それは、住民と観光地をどのように結びつけるか、ということであつた。何度も言うように観光地というのはその地域に関わる人々全体で作り出すものである。住民との相互理解があつてこそ観光であろう。

《付記》

大社町役場観光商工課と大社観光協会、そして出雲大社近辺に位置する宿泊施設の竹野屋と藤原旅館の方々には大変お世話になりました。末筆ながら感謝の意を表します。

文献・資料

淡野明彦（1998）：『観光地域の形成と現代的課題』古今書院。

足羽洋保（1997）：『観光資源論』中央経済社。

国民経済研究協会（1966）：『観光開発と地域経済』。日本観光協会。

野本晃史（1995）：『山陰の観光地理』山陰観光研究会。

島根観光学会（2001）：『島根の観光 戦後の軌跡』島根観光学会。